



日本防災文化
世界発信
プログラム
2018

事業報告書

編集 / 発行：特定非営利活動法人 医療ネットワーク支援センター
東京都新宿区西新宿 6-15-1-412
TEL. 03-6911-0582 (代表)
2019年2月発行

担当者：李 慧仁
MAIL: bousai-bunka@medical-bank.org
HP: <http://www.medical-bank.org/bousai-bunka/>



この報告書は、競輪の補助を受けて制作しました。

特定非営利活動法人 医療ネットワーク支援センター



01

はじめに

2011年の東日本大震災から8年近い歳月が流れました。生活再建には長い時間がかかることを痛感しながら、私たちは首都圏に避難している方々と一緒に伴走しています。その活動から多くのことを学ばせて頂きました。中でも貴重な学びは、目に見えない“心”の復興こそが“人”の復興だということ。そして、震災を体験した方々の生の声を風化させず、教訓として未来に伝えることの大切さでした。

そのため、避難している方々と共に学生との交流で語り、学校の授業に出向いて子どもたちに語り、地域の人々の輪の中でも語ってきました。

ここでは、本プログラムに参加した学生が、震災の体験を避難者の生の声から学び、震災の教訓と防災の知恵を日本の「防災文化」として国内外へ発信するなどの取組を報告書としてまとめました。ご高覧いただければ幸いです。

2018年度JKA補助事業「日本防災文化世界発信プログラム2018」
医療ネットワーク支援センター 理事長 人見 祐

目次

01 はじめに	03
02 東日本大震災をふりかえる	05
03 県外避難者から学ぶ震災の教訓	07
04 「日本防災文化 世界発信 プログラム2018」について	10
05 来日外国人向け防災文化教室	12
06 防災文化国際イベント	15
07 活動のまとめ	17
08 感想文	29
09 「日本防災文化 世界発信 プログラム2018」参加者アンケート	38
10 添付資料	43

02

東日本大震災をふりかえる

東日本大震災について

- ＞ 2011年3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmで発生
- ＞ 地震の規模はモーメントマグニチュード（Mw）9.0で、発生時点において**日本周辺における観測史上最大の地震**。
- ＞ 震災による死者・行方不明者は1万8,434人、建築物の全壊・半壊は合わせて40万2,699戸が公式に確認されている。（2018年3月9日時点）
- ＞ 震災発生直後の**ピーク時における避難者は40万人以上**、停電世帯は800万戸以上、断水世帯は180万戸以上。
- ＞ 政府が発表した復旧・復興関連費用は、**10年間で国と地方合わせて総額23兆円**。



03

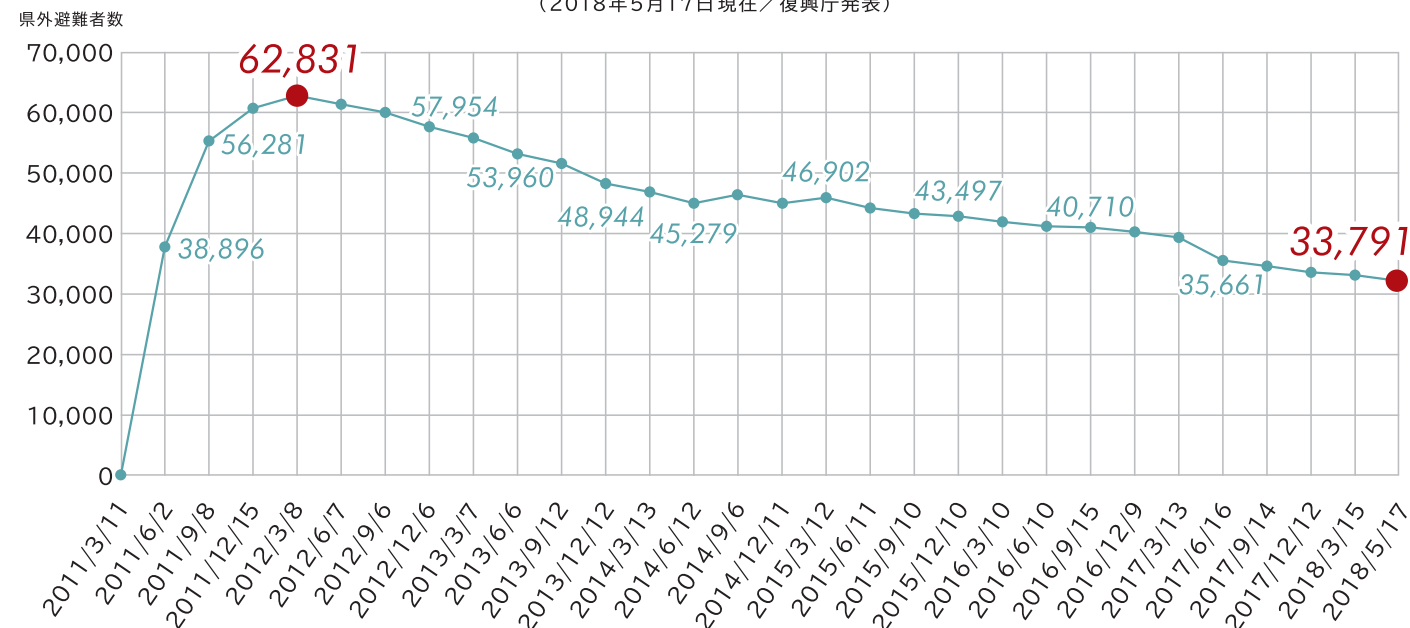
県外避難者から学ぶ震災の教訓

東日本大震災から7年。現状は？

- ＞ 全国の避難者数は、**約5万4千人**（福島県、岩手県、宮城県からの避難者の合計）。
- ＞ 全国47都道府県、1,009の市区町村に所在（※平成20年12月11日現在）。
- ＞ 特に原子力発電所事故があった**福島県からの県外避難者は、33,791人**、そのうち**関東では、18,712人**が県外避難生活を続けている。

福島県から県外への避難者数の推移

（2018年5月17日現在／復興庁発表）



発災時のこと

水道管の破裂で
水が出なくなり、
3.11の夕食に困っていた
知り合いの家の
井戸水をいただき、
凌ぐことができた

防災の放送が
聞こえ
にくかった

すぐに避難が
解除されると
思っていたので
毛布一枚持たずに
避難してしまった



支援など
自治体からの
情報が
とぼしかった

仕事中だったため、
津波の情報等は、
かなり時間が
経ってから知った

緊急避難所でのこと

着の身着のまま
風呂にも
入らなかったため、
避難所の
教室に体臭が
充満した。

水が
足りていなかった
水が翌日に
なって届いた

役場職員も
何人か常駐していたが、
本部から何も入らない
と云うだけで
全然どうなっているのか、
分からなかった



避難所では
段ボールと
薄い毛布2枚で
生活していました

町で指定された
場所には入れず、
避難所を探すのに苦労した
事前に、近隣の市町村の
避難場所等の
地図があればよかった

赤ちゃん用の
ミルクや
オムツが無く
困っている人が
沢山いた

情報を
求めるためには
携帯ラジオが
必要だった

関東に避難してくる時のこと

母と義母の
高齢者をかかえての
避難だと、トイレや
食べ物等
困りました

避難先の地理が
分からないので
不安だった

次女の所に
2週間ほどいたが、
4月から孫の学校も始まるため、
そこから近所に
アパートを借りる。
その後1か月程
アパートに居たが、
雇用促進住宅に避難



都営住宅に
入居した人は
情報があつたが、
個人の所に避難した人は
なかなか情報が
なくて大変

避難する途中で
ガソリンを
入れたくても、
入れられる量が
1,000円分等
制限された

避難してからのこと

応急仮設住宅の、
申し込みの窓口が多く、
どこに申し込んで
いいかわからず困った

頼れる場所が
無く困った

初年度より同じ住宅で
暮らしていた
仲間が各方面に
家を構築し
出ていってしまい、
寂しい思いがあります



県外と
県内避難先との
生活支援の
差がありました

避難先での情報は
何もなかった。
自分で市役所に行ったりして
忙しかった
(自分で動かないと)
何もわからない。

私たちにしか伝えられない事がある

私たちは、そんな志を持って6つの大学から集まりました。近年、世界各地で自然災害が多発している一方、日本は、様々な自然災害を乗り越え、防災文化を発展させてきました。だからこそ、今、私たちが持つ「防災」知識・文化を世界の人々に伝え、繋げていきたいと思いました。

日頃の備えが、世界中の安心と笑顔に繋がると思うから。若い力が被災地へのエールになると思うから。

私たちは、震災の経験を教訓とし、「私たちにしか伝えられない事」を世界に向けて発信します。



実施内容

(1) 防災文化発信・交流フォーラム開催

日時：平成30年6月3日(日)

会場：渋谷区・シダックスカルチャービレッジ6階カルチャーホールB

参加者数：121名

(大学生／避難者／有識者／復興庁、東京都、福島県、宮城県などの関係者およびスタッフ)

内容：>09:30～10:00／東日本大震災の課題・世界の震災現状と防災取組に関する講義

>10:00～16:00／ボランティア体験

※当団体主催の県外避難者の交流イベントにて実施

※参加学生が避難者のテーブルに入り、震災当時の経験などの生の声をヒアリングする。

>16:00～17:00／フォーラムの振り返りとグループワーク



(2) ワークショップ(防災文化発信分科会)開催(全4回)

>第1回分科会開催／平成30年6月17日(日) 15:00～18:00

>第2回分科会開催／平成30年7月 8日(日) 15:00～18:00

>第3回分科会開催／平成30年8月 7日(火) 17:00～19:00

>第4回分科会開催／平成30年8月17日(金) 17:00～19:00

会場：セントラルパークタワー・ラ・トゥール新宿 3階コミュニティルーム1

内容：防災文化国際交流イベント(韓国・ソウル)と来日外国人向け防災文化発信教室(国内)に向けて、発信する日本防災文化のコンテンツを企画・準備



05 来日外国人向け防災文化教室

05 来日外国人向け防災文化教室

第1回 防災文化発信教室開催

日時：平成30年9月2日(日)11:00～16:00

会場：都立戸山公園・新宿スポーツセンター

参加者数：延べ126人(イベント来場者数：約1,800名)

内容：2018年9月2日(日)、新宿区の戸山公園で開催された「しんじゅく防災フェス2018」にブース出展し、来日外国人向け防災文化発信教室を実施。

震災の教訓をもとに、日本防災文化発信するための展示・ワークショップを行う。

(ポスター展示／防災の〇×クイズゲーム／三角巾応急処置体験／防災意識の啓発のための冊子・パンフレットの配布)

感想：来場者アンケートより抜粋 ※外国語は一部翻訳

- ＞子供にも分かりやすくて良かったです。
- ＞勉強になりました。ありがとうございます。
- ＞すごくためになりました。実践することが大事だと感じました。
- ＞日頃、災害のことを考えないので、きっかけとなりました。
- ＞災害に備えようと思いました。
- ＞災害が起きた時の対応について学びました。
- ＞このようなイベントはとても大切であると感じました。
- ＞私も災害時に備えて三角巾を買いたいと思います。
- ＞防災について学ぶ機会がなかったので、今日は来てよかった。



01 はじめに

02 東日本大震災をふりかえる

03 県外避難者から学ぶ震災の教訓

04 日本防災文化世界発信プログラムNO.00について

05 来日外国人向け防災文化教室

06 防災文化国際イベント

07 活動のまとめ

08 感想文

09 日本防災文化世界発信参加者アンケート

10 添付資料

第2回 防災文化発信教室開催

日時：平成30年10月27日(土)／28日(日)10:00～17:00

会場：代々木公園・ケヤキ並木

参加者数：延べ409人

内容：2018年10月27日(土)／28日(日)、渋谷区の代々木公園で開催された「EARTH GARDEN“秋”2018」にブース出展し、来日外国人向け防災文化発信教室を実施。
震災の教訓をもとに、日本防文化発信するための展示・ワークショップを行う。
(ポスター展示／防災の〇×クイズゲーム／三角巾応急処置体験／防災の豆知識を伝えるクッキー販売／防災意識の啓発のための冊子・パンフレットの配布)



06

防災文化国際イベント

防災文化国際交流イベント(韓国・ソウル)

日時：平成30年9月9日(日)10:00～19:30

会場：COEX展示場3階 Dホール(韓国 ソウル特別市 江南区 三成洞)

参加者数：延べ603人(イベント来場者数：約50,000人)

内容：海外の人々に日本の防災文化を発信するために、2018年9月9日(日)、韓国・ソウルで開催された「日韓交流おまつり2018 in Seoul」にブース出展。日韓の大学生および避難者が交流しながら、来場者に向けて防災の大切さや日頃の備えについて発信する展示・ワークショップを行う。
(ポスター展示／防災の〇×クイズゲーム／災害時の有効な防災グッズづくり／防災意識の啓発のための冊子・パンフレットの配布など)



07

活動のまとめ

日本防災文化世界発信 プログラム2018

目次

1. プログラムについて
2. グループ
3. メンバー
4. スケジュール
5. 分科会のプロセス

1

1. プログラムについて

日本は、数々の震災を経験した国



3

2. グループ

国内グループ



韓国グループ



5

3. メンバー

国内グループ

川上奈々子
長友清楓
金澤理都
大阪日和
佐藤琴乃
小尾加奈子
濱田菜央
浅見真衣

韓国グループ

栗田茉奈
岩本愛里
山田わかな
長嶺梨央
大島千春
吉川莉香
伊東優真
関根遥香

6

4. スケジュール

2018年5月
サイトから応募



7

5. 分科会のプロセス

- ①「震災」「防災」について調べる
- ② 広めるべきことを話し合う
- ③ 広める方法を企画する

9

ABOUT KOREA 韓国はどんな国？

001
韓国について



11

4. スケジュール

6月17日から
分科会



8

防災文化国際交流イベント in「日韓交流お祭り」

10

韓国のイメージ



12

韓国の紹介



大韓民国
首都：ソウル特別市
面積：100,200km²
人口：50,896,594人

日本
面積：378,000km²
人口：125,738,357人



13

韓国の震災状況について

韓国では被害をおこす地震は少なく、中小規模地震（M3～7）は年間平均67.6回。
2017年にはM2.0以上の地震が、総223回。

一方、日本では年間1,877回の中小規模地震が起きている。これと比べると韓国は地震の少ない国と言える。そのため、防災への意識が未だに低い。

14

韓国の震災事例について

・浦項(ポハン)地震

2017年11月15日、韓国の南東部慶尚北道にある浦項(ポハン)でM5.4の地震発生。92名が怪我、被災者1,797名。



15

韓国の防災対策について



学校や幼稚園などでの避難訓練



戦争に備えた訓練も実施

一部の地域では、日本の防災頭巾を参考にして実施

16

韓国の防災対策について

- ・長らく「地震安全地帯」と言われてきた韓国での地震増加。
- ・2015年以降M2.0以上の地震が33回計測。
- ・一方韓国は、耐震設備の整っていない超高層マンションやオフィスビルが多い。
- ➡①地震に対する制度や防災策が不十分
②一般市民の防災意識が未だに低い



17

当プログラムの目的

- ・韓国は地震が少ないため、防災訓練・教育が不十分である。
- ・このような事情を踏まえ、日本の防災文化を元に、クイズや防災グッズ作りを通じて、防災の基礎知識を身につけ、防災への意識を高める。



18

002
日韓交流
お祭り



19

日韓交流お祭りとは？



20

日韓交流お祭りの歴史

2005年 ➡ 「日韓友情の年」の重要事業として、毎年ソウルで行われた。

2009年 ➡ 毎年、両国のソウルと東京で「日韓交流お祭り」を開催。

日本での「日韓交流お祭り」は、今年で

10周年 でした！！

21

日韓交流おまつり

日韓の文化の違いをより理解し、
お互いをより尊重し合うきっかけ

文化交流

市民交流

青年交流

地方自治体
交流

22

当プログラムの様子



23

他の団体の様子



24

着付けブースの様子



25

日韓よさこいチームの共演



26

ポスター展示の内容

- ・世界の震災状況について
- ・東日本大震災について
- ・東日本大震災の被災者の経験談
- ・「防災文化」とは何か
- ・災害時の行動の基礎知識
- ・事前の備え・対策



31

来場者の反応

防災に関する知識が
乏しいことに気づいた。

震災時の避難は日頃の
訓練が重要だと感じま
した！



32

今年の日韓交流お祭り
について

日付：2018年9月9日(日)
開催時間：10:00～19:30
場所：COEX Dホール
(韓国 ソウル特別市 江南区 三成洞)



27

003
日本防災文化
コンテンツ

28

学んだこと・反省点

〈学んだこと、感想〉

- ・他国の方に自国の事を伝える難しさを知った。
- ・来場者の方々が防災について楽しそうに学んでいる姿を見て、有意義な時間になった。

〈反省点〉

- ・ポスターの配置や大きさを工夫するべきだった。
- ・配布冊子がすぐになくなってしまった。



33

防災クイズゲーム

1. 目的：

日本の防災文化をもとに地震発生時の行動・対応や災害の対策など基礎知識をクイズゲームを通して知ってもらう。

2. クイズの長所：

クイズで楽しく学べて、「防災」は難しいものではなく身近なものである意識をしてもらえる。

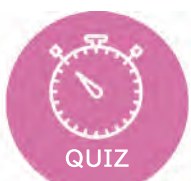


34

今回のプログラムで
実施したコンテンツ

POSTER

ポスター展示



QUIZ

防災に関する
クイズゲーム

GOODS

災害時に役立つ
グッズ作り体験

29

ポスター展示

1. 目的：市民の防災意識の啓発
2. 目標

- ・東日本大震災、世界の震災の現状を知ってもらう。
- ・地震時にどう行動したらよいのか、また、地震が起きる前の事前対策を伝える。
- ・いつもの暮らしで出来る防災で、よく遭遇する場面による災害時の行動や備えに関する知識を知ってもらう。



30

クイズの内容



- ・日本の防災文化をもとに地震発生時の行動・対応や災害の対策についての〇×クイズを行った。

35

参加者の反応

クイズを通して自分の防災
知識が間違っていることに
気づいた！

万が一起きるかもしれ
ない災害に対して、少し
備えることができて
良かった。

地震で揺れているとき
ガスコンロの火をすぐ
に消してはいけない
ことを初めて知った。

日本の防災教育の
方針や対策等が
韓国より発展して
いると実感した。



36

学んだこと・反省点

〈学んだこと、感想〉

- ・参加してくださった韓国の方やボランティアの学生と交流できたことは有意義だった。
- ・クイズを通して「防災」という同じ問題意識を持つことができたことは良かった。

〈反省点〉

- ・言語が通じないという状況でのコミュニケーションの取り方や情報の伝え方の難しさを感じた。



37

災害時に役立つ グッズ作り体験



1. 目的：

- ・災害時に新聞紙や不要チラシなど身近なもので簡単な日用品を作る方法を身に付けてもらう。
- ・身近なもので自分の身を守るという考えを持ってもらう。

38

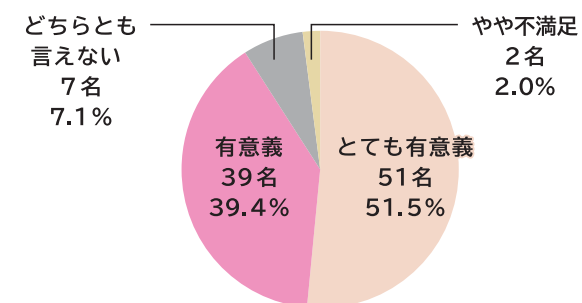
イベント参加者における 防災意識調査

- ◆実施場所：
日韓交流おまつり2018 in Seoul
- ◆実施日時：
2018年9月9日(日)10:00～16:00
- ◆回答者数：
来場者約603人のうち99人回答
- ◆出身国：
韓国人92名／日本人7名

43

意識調査 結果 1

本日のプログラムは役に立ちましたか？



44

災害時に役立つ グッズ作り体験

2. グッズ体験の長所：

展示やクイズに比べて、体験することによって、防災への興味を集められることは無論、災害時の対策を身に着けられる。

3. 実施内容：

新聞紙スリッパ
紙で作るお皿・小物入れ



39

参加者の反応



40

意識調査 結果 1

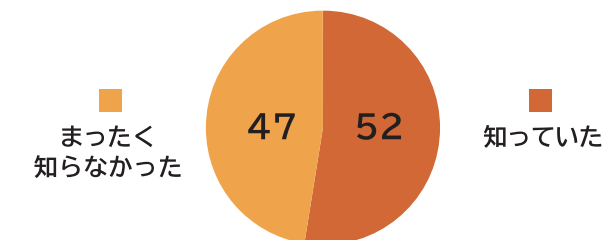
本日のプログラムは役に立ちましたか？

- ・日本は、韓国より地震や津波に対する対策がより優れていることは知っていたが、新聞紙でスリッパを作ることができるのは初めて知った。すごく驚きました。
- ・防災に対する知識が増え、大変有意義な時間を過ごすことができた。
- ・このような活動を通じて、ほんの少しですが震災の備えができて良かったです。
- ・自分自身、防災に関する知識が乏しいということに気づいた。
- ・地震に備えなければならなかった。

45

意識調査 結果 2

東日本大震災から7年が経ちましたが、今でも避難生活を送る方が大勢（関東地方で約2万2千人）いることをご存知でしたか？



46

学んだこと・反省点

〈学んだこと、感想〉

- ・私たちは当たり前だと思っている防災の知識が、異なる文化や背景を持つ国では当たり前ではないことを痛感した。
- ・身近なものでも身を守れることを楽しみながら意欲的に知っていただけなのは良かった。

〈反省点〉

- ・思った以上参加者が多く、席が足りなかった。



41

004
まとめ



42

意識調査 結果 3

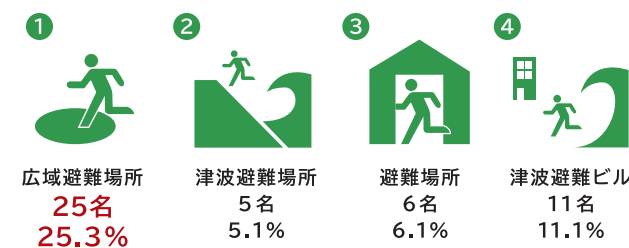
展示や冊子をご覧になって、防災について意識の変化や感じたことはありますか？(複数回答)

項目	回答者数	回答者数に占める割合
日頃、災害に備えておこうと思いがちだが、できなかったもので、これを機に改めて備えをしようと思った	82名	82.8%
家族で避難場所などを話し合おうと思った	22名	22.2%
日頃の地域のコミュニケーションが大切だと思った	16名	16.2%
すでに防災対策はできている(ということを確認できた)	3名	3.0%
その他	3名	3.0%

47

意識調査 結果 4

次は、日本の標識(ピクトグラム)です。分かりづらいものはありますか？
また、改善してほしい点などありますか？



48

反省点および改善点

【ポスター展示】

場所の関係で、来場者の見えにくいところに展示となってしまった。今後は準備の際に、来場者に視点で考え、工夫が必要。

【配布物】

想定よりも大勢の方が来場して、配布物が足りなかった。

【参加者への対応】

混んでいる時、来場者一人ひとり親密な対応が上手くできなかった。臨機応変な対応が必要。

49

今後の課題

- ・地震による自然災害や防災は、日本だけではなく、**全世界と一緒に考える重要な課題の1つ**。私たちが学んだことを今後も**伝えていくことが重要**。
- ・自国の文化を伝えるには、より積極的に自国の文化を知るべき。
- ・体験談を直接聞いてもらうことで、防災をより**身近なもの**と考えられる。
- ・本プログラムから学んだことを、今後どのように社会に生かすべきか。

50

実施内容

全活動において
英語対応専用カードを作成!

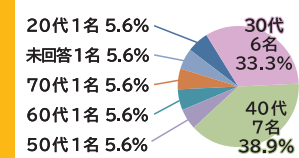
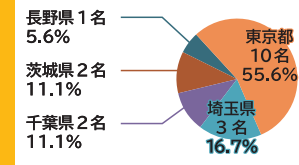
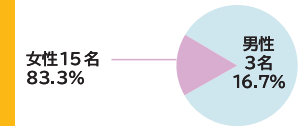
1. 三角巾で応急手当
(頭・腕・膝の止血&骨折時の腕固定)
2. 防災クイズ
3. アンケート
(防災や震災の意識調査)
4. 防災クッキーの販売

55

実際の様子・反応

～アンケートから～

- ・女性が多い
- ・東京都からの参加が多い
- ・30代が多い



56

国内グループ

「訪日外国人」をターゲットに
防災文化の発信

9月、10月に
2つのイベントへ参加

52

参加者の様子： 防災クイズ

子どもたちが参加
↓
親が見守る
↓
親子での
防災意識向上



57

参加者の様子： 三角巾体験

親が率先して参加
↓
熱心に質問する
↓
家族のもしもに
備えるために学ぶ



58

しんじゅく 防災フェスタ2018

防災の日にちなんだ皆が
楽しく学べる防災・減災
イベント



9/2(防災の日)
@都立戸山公園

53

earth garden “秋”2018

飲食、ハンドメイド等の
様々なジャンルの店舗
が出店



10/27.28
@代々木公園

54

学び



1. 伝えることの大切さ
2. モノを売る難しさ
3. 様々な方々との関わり方

59

反省点



1. 外国人へのアプローチが弱かった
2. マーケティングについての知識が浅かった
3. 防災知識をより深める必要性がある

60

今年の漢字

災
い
転
じて
福
となす



今後の展望

総 評

- ① 新宿防災フェスタ
9/2(防災の日)@都立戸山公園
- ② earth garden“秋”2018
10/27.28 @代々木公園
- ③ 分科会
- ④ 韓国での活動

今後の課題と解決案

- 課題①
外国人へのアピール
- 課題②
物を売ることの難しさ
- 課題③
伝える防災知識

今後の計画

- 知識を伝えたい外国人の明確化
＞その外国人への聞き込み
- 防災知識を伝えるものの販売
＞何を誰に売っていきたいか明確化
- 防災知識
＞ボランティアでの直接の対話から学ぶ

ご清聴ありがとう
ございました



08 感想文

伊藤 優真

神奈川県立保健福祉大学 保健医療福祉学部 社会福祉学科 2 年

活動に参加してみようと思ったきっかけは？

オーストラリアでの留学がきっかけで、日本だけで学ぶことの世間の狭さを知り、海外を訪れる事や海外の人と触れ合うことの充実感を知りました。今までは学ぶだけという一方通行でしたが、大学に進学し、自身の時間を有効活用出来るようになった今、「今度は自分がこれまで得てきた物を海外に発信する番だ」という想いで参加しました。

学んだことは？

自分自身が通う大学の学生ではなく、他大学の学生と連携して 1 つの大きな到達点を目指して連携するという活動に初めて参加しました。月に数回の分科会での顔合わせや SNS でのコミュニケーションによる準備で戸惑う場面も多々ありました。その中で個々人が時間を作って何かを作り上げることは素敵なことであり、これから一步一步社会へ歩もうとするひとりとして良い経験となりました。

参加してみての感想は？

北海道で起きた「平成 30 年北海道胆振東部地震」や西日本豪雨など、いつ何処で災害が起きるか分からない今日、自然災害に強い日本の防災文化を、日本学生の 1 人として海外に発信できたことは有意義なものでした。また、今回参加したイベントが日韓交流ということで、発信するだけでなく、韓国の文化を知ることが出来たことで、自分自身のスキルアップにも繋がりました。現地の学生と実際に言葉を交わすことで得られるものは日本で学ぶこととは違い、充実感がありました。

佐藤 琴乃

駒沢女子大学 人文学部 国際文化学科 3 年

参加理由

今回この活動に参加した理由は 2 つあります。一つ目は、自分の防災に対する知識の無さを痛感したから。そして二つ目は海外の人の役に立ちたかったからです。

一つ目の理由に関して。以前私は海外の方々と各国の災害・対策について話し合う機会がありました。災害大国日本について様々な質問をされる中で、私の全く答えられない質問がいくつもありました。今まで自分の命に関わる災害に遭ったことがない、だから災害が起きてもなんとかなると災害対策を甘く見ていた自分に気づかされました。近年異常現象が起きている中で災害対策についてしっかり考えなくてはいけないと強く感じ参加を決めました。

二つ目の理由に関して。これも海外の方々と災害・対策について話し合う機会からです。先の通り、私は災害対策についてまだまだ知識が浅いところが沢山あります。しかし、災害があまり起きない国に住んでいる方、または災害対策が遅れていると言っていた方が想像以上に多くいました。その方々が日本旅行の際災害に遭ってしまったら、災害対策を知らないことにより楽しい時間が最悪なものになってしまうかもしれない。そんな方々を 1 人でも減らしたい。自分も勉強しながら海外の方々に対策の大切さを教えたいと感じ参加を決めました。

活動を終えて

大きく学べたことが 2 つあります。「伝える」という事の大切さ、難しさ。さらに目標設定の大切さです。
「伝える」という点。分科会の際、どんなに小さな事で伝えることを怠るとそこから勘違いが生まれてしまう。また、自分の伝え方ひとつでも相手には様々な捉え方をさせてしまう。新宿フェスタ & アースガーデンでは、大人へ向ける伝え方、子供へ向ける伝え方が全く違い、自分では理解していてもそれを相手が理解してくれるように伝えるのがどんなに大切でまたどんなに難しいか。海外の方への伝えるという点においても、違う言語で伝える難しさ。言い回しの違いによる認識のズレなど活動全体を通して「伝える」という事に向き合えました。

目標設定の大切さにおいて。今回は海外に防災文化を発信しようということで、活動がスタートしました。結果としては、様々な年代の方々に災害対策の大切さは伝えられました。しかし、海外の方々へのアプローチが非常に弱かったように感じます。具体的にどんなアクションを起こせば伝わるか、海外の方に対して最低でもこれだけは伝えよう、などどんなに小さいことでも目標を立てることが大切であると学びました。目標そしてそれを達成できた事を自分たちの目に見える形(例えば数字で表すなど)で提示する事でモチベーション、達成度にも繋がると思います。

今回学べた事は防災文化の活動以外の様々な場面においても非常に大切です。学びを今回限りにしないよう、活かせるよう努めていきます。
今回の活動で防災文化を発信できただけでなく、自分の防災意識も見つめ直すことができました。クイズなどを作成していく中で新たに気づいた事を家族や友達に伝えられたり、もう一度知識の確認ができたり、非常に有意義な時間を過ごせました。また他大学の学生と一緒に活動できたこと、新宿フェスタなどを通して様々な年代の方々と出会えたこと、さらに輪が広がり貴重なものとなりました。今後も防災対策の大切さを自分でも忘れず、周りに発信していきます。

皆様、半年間ありがとうございました。

浅見 真衣

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 4 年

本プログラムに参加したのは、東日本大震災が大きく影響している。私は、中学二年の頃にこの大震災を経験した。関東でも物凄い揺れで大パニックだったことや、テレビでみる被災地の状況に深い悲しみを感じたことを今でも鮮明に覚えている。大学三年の頃からは、同大震災の被害を受けて関東に避難した方々の交流ボランティアに参加している。ここで、7 年経ってもなお、故郷に戻れず悲しんでいる方が沢山いることを知った。これらの経験を通して「この時代に生まれた者として、災害の恐ろしさや防災の大切さを伝えていく責任がある」と感じるようになった。本プログラムの目的は、大学生が国内外に防災を発信することであり、これに共感して参加を志願した。

活動を通して、当初から持っていた責任を果たすことができたと感じている。秋に実施された 2 つのイベントでは、多くの子供たちが集まり、クイズで楽しく防災知識を伝えられることができた。先の大震災を知らない世代に、充分に災害と防災の啓発をできたと自負している。さらに、子供の後ろで見守っていた親たちもクイズから新たな防災知識を得られたようだった。これには、大学生という立場が良く作用していると感じた。子供にとっては「お兄さん・お姉さん」と親しみやすい存在として認識され、親世代にとっては「若者」の活動として刺激や関心を得られたと実感できたからだ。

一方、外国人には積極的に関わることができなかったことを課題としたい。言葉の壁を恐れたことにより、日本の優れた防災文化と知識を発信することができなかった。今後は、準備の段階から必要な単語やフレーズを練習していくべきと考える。

本プログラムでは、当初の目的ではなかった面からも学ぶことが多かった。例えば、コミュニケーションやマーケティングなどを実践的に学ぶことができた。前者では、子供やお年寄りなど普段関わる機会のない世代との会話で、声のトーンや単語選びなどに気を遣うことができた。後者では、クッキーを企画から販売まで行ったことでモノの売ることの難しさを痛感することができた。今回学んだことは、本プログラムの運営と自身の将来に活かしていければと考える。

最後に、このような多くの学びと貴重な経験の場をご提供くださった皆様に深く御礼申し上げます。

金沢 理都

大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 3 年

友人からの誘いを受け、昨年 6 月から半年ほどの期間、防災文化世界発信プロジェクトに参加しました。私は実家が西日本なので、東日本大震災の被害を画面越しでしか目にしたことはありませんでした。そのため、このプロジェクトに参加することに対して少しの不安を抱えていました。しかし、被災した方々との触れ合いを通じて、当時のお話を聞かせていただく中で自分には何ができるのかと考えたところ、このプロジェクトに参加する必要性を強く感じました。

このプロジェクトでは、イベントでのブースの出店を通して、日本に滞在している外国人に向けて、防災についての知識を広めることに取り組みました。私たちも防災に関してのプロフェッショナルではないため、自らが知識を得る事から始まりました。イベントに出展する際にどのようなアクティビティを実施するのかということから決めました。イベントでは、最も知識を伝達しやすいクイズを作成し出題や、災害により怪我を負ってしまった際に役立つ三角巾の使い方のレクチャーを実施しました。私は主にクイズの作成に携わりました。日本に滞在している外国人をターゲットとしているため、クイズの文面に英語訳を併記するなど、工夫を凝らしました。

そして、これらの取り組みを通しての学びは、自分たちが伝える立場に立つためには、なぜこの情報を伝えたいのかを明確にし、それに関するより多くの情報を得ようとする姿勢が重要だということです。

防災について少し違う視点から伝えたいという考えから行った防災クッキーの販売においては、経験も知識も浅い中で、至らない点や反省点も多くありましたが、無事完売することが出来、良い結果が残せました。所属する大学も年齢も異なる数人のチームがわずかに半年間でこんなに団結し、連携できたことに、感動を覚えました。

多くの人に防災の大切さを伝えるという本来の目的を達成できたと同時に、このようなプロジェクトに携わることができ、自分自身の成長にも繋がり、普通の大学生活の中では出来ないとても貴重ないい経験となりました。就職活動や、社会に出てからも、このプロジェクトを通して学んだ“積極的に行動する力”と“チームで協力して一つのものを作り上げる力”をより高めて精進して行こうと思います。

川上 奈々子

実践女子大学 人間社会学部 1 年

このプログラムに参加しようと思ったきっかけはいくつかあります。一つ目に大学の夏休み前、高木先生の講義でこのプログラムについて知ったことでした。私は大学一年のため、夏休みは主にアルバイトくらいしか予定がありませんでした。大学に入学し、自由にいろいろなことを学んだり、経験したりする機会が与えられている期間なのに、アルバイトしかないのはとても勿体ないし、つまらないと思い、高木先生にプログラムの紹介があったその日の講義後に声をかけ、高木先生から「とっても良い機会になると思うよ」と背中を押していただきました。二つ目に、2020年に行われる東京オリンピックのテーマの一つに「防災」とあったからでした。2020年に東京にやってくるオリンピックのボランティアに参加したいという思いがあり、今からでも「防災」というテーマに沿った活動がしたいと思っていた私には絶好の機会でした。三つ目に中学の頃の理科の先生が、災害についての授業を熱心に行ってくくださる方で、災害に対する危機管理の大切さを教え込まれており、その知識をいかす、または深めることができないかと考えました。これらの理由からこのプログラムへの参加を決意しました。

プログラムでの活動を始めたばかりの頃、分科会に参加すると先輩ばかりで、とても緊張して、積極的な発言がなかなかできずにいましたが、先輩方は、私が話すことにも真剣に耳を傾けてくださり、私が提案した「三角巾での応急手当体験」がブースの企画として実行されると決まった時はとてもうれしく、自信にもつながりました。分科会を重ねたり、ボランティアをしたり、新宿防災フェスタ・アースガーデンで活動したりする中で、今まで知らなかった防災の知識や、被災者の方々の現状、イベントを運営する中での自分の役割、ブースに来てくれた方との接し方など様々なことを学びました。被災者の方々のなかには7年たった今でも、東北に戻りたくても戻れていない方がいる一方で、もう関東で今後も暮らしていこうと決めた方もいらっしゃることを知り、どちらの方々も故郷に戻りたいという気持ちはあるとは思いますが、現実と向き合って、色々な思いを抱えながら日々暮らしていることを知りました。この活動の中で東北からいらっしゃった方々と何度もお会いし、お話をしていく中で「ここ(こっちゃ来たらいいべえ)があるでしょ。」と、こっちゃきたらいいべえに今の自分の居場所があると話してくださった方がいて、そう思っていただけのようなイベントにボランティアとして参加し、少しでも思いに寄り添うことができて本当によかったです。

反省点としては、やはりターゲットとしていた外国人にあまり来てもらえなかったことです。ブースの装飾などでもっと外国人向けであることをアピールすることが可能でしたし、ブースの企画内容も外国人受けするような内容にできたのではないかと思います。また、外国語に自信がないことから、外国人通行者に対して消極的になっていたところもあると思うので個人的にも外国語の勉強に力を入れるべきであったと思います。

角田 絵梨子

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 2 年

日本の「防災文化」は概念として留めておくだけではもったいない。今回のプログラムへの参加を希望したのは、そのように思ったことがきっかけだった。私たちにとって小学生の頃から防災訓練を受けるのは当たり前のことだし、災害に対するニュースや対策法を発信する番組が流れることもごく普通のことだ。当然と感じていたことが役立つ知識として人々に伝えられることができるのは、これまで多くの被害を受けてきた日本だからこそできるものなのではないか。まさに、「私たちにできること」の内の一つがこのプログラムに参加することなのだと思った。

活動を通して様々な紆余曲折があったように感じる。責任感のなさが露呈している時もあれば、勢いに乗っていた時もあった。私が最初に壁にぶつかったのは、担当分野を決定した後だ。グループ内で互いに曖昧な認識でいたことが原因だったと感じている。今後の見通しが不明瞭で、計画性があまりなかったので道に迷っているかのようなだった。

しかし、そのような困難に直面することによって自分自身は何をすべきなのかを把握できるようになった。担当分野のグループで今後の方針を決められていなかったことから、自ら提案したりたくさん発言したりしたことで、次第に積極性を身に付けることができたと感じている。このことから困難に直面することは、自身の成長を促すものだという学びを得ることができた。

またこのプログラムを通して、不十分だった点もある。それは、防災に対する知識が浅かったということだ。私たちが活動で発信してきた内容の情報源は主にインターネットなどアクセスしやすい媒体を経由して得た知識が多い。たしかに、知っているようで知らなかったことへの再認識を促すことはできただろう。しかし、実際に被災された方との交流を行っている私たちだからこそ発信できることはもっとあったはずである。浅く広く情報発信を行うと表面的なものになりかねない。それよりも、深堀をして深く狭く情報発信をする必要があったのではないだろうか。そうするためには、分科会において「各イベントで何をするか」を先行して決めるのではなく、「私たちが発信したいことは何か」を決めることで目的意識を明確化していくことが大切だったと思われる。

上に述べた反省点は、このプログラムで得られた果実の内の一つだ。今後の様々な活動では目的や目標を設定しそれに向けた施策を練るという手順で進められるようにし、就職活動などで示せるように努めていきたい。

岩崎 薫

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 2 年

今回、私がこの防災文化プログラムに参加したのは、以前参加した東日本大震災のボランティアがきっかけであった。ボランティアに参加する以前は震災の起きた日の前後にある特別番組で見聞きするのみで、日常で触れる機会は少なかった。しかしボランティアに参加して被災者の方々とお会いし、その現状を知ったことで自分がいかに無知であったかを痛感した。そしてイベントに参加されていた被災者の方々は楽しそうにしおりを作ったりお話をしたりしていたが、このように笑えるようになるまでかかった時間や今までの想いはどうであったのかを深く考えるようになった。そのため今回の防災文化プログラムに参加し、自分も震災や防災についての知識を深め、さらにそれを発信することで多くの人が向き合うきっかけを作りたいと思い、参加を決めた。

私は韓国で日本の防災文化を広めるチームに参加し、事前調査では韓国の地震について調べた。その中で地震の起きる回数を韓国と日本で比較して日本が地震大国と呼ばれる理由を実感し、それとは逆に韓国は長らく地震安全地帯と呼ばれていたことを知り、驚いた。地震についての対策があまりなされていないところに起きた地震により、大きな被害が出ていた。私はこのことから韓国に防災先進国として防災に関して世界と比べて優れている日本の防災文化を伝えることの重要性をさらに強く感じた。日本の防災についても事前に調査をし、日本が行なっている取り組みについて改めて知ることができ、また今まで知らなかった新しい知識も身につけることができた。

当日のイベントでは、実際に韓国人の方々と接する中では、韓国人の方も防災について関心があることを見受けることができた。パンフレットを配布する際に質問されたり、クイズのコーナーでは答えの解説を注目して聞いている人が多かったりする様子から関心を持っている様子が伝わった。クイズや体験コーナーなど楽しく伝えられる工夫をしたことで、防災についてきになるきっかけになれたと感じた。クイズの作成の段階では、楽しく真面目な正しい知識を伝えることは難しいのではないかと感じていたが、来場者の方の反応から防災の硬いイメージも払拭できたのではないと思う。

このプログラムを通し、初めて知ることばかりで多くの学びを得ることができ、また他大学、他学年の人と行うプログラムは初めてであったため、多くの刺激を得ることができた。地震だけではなく世界のあらゆるところで突然起きる自然災害からは逃れることはできないが、今回得たものを自分から周りの人に積極的に発信し、防災の知識によって少しでも多くの命が救われて欲しいと感じた。

長友 清楓

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 2 年

今回、本プログラムに参加させていただきとても学ぶことが多かったと感じています。参加に至った経緯は大学の教授からの勧めでした。ゼミの卒業生がいるからいってみないか、ということでお会いしてみたいと感じたとともに、本プログラムの内容を見たときに私は全く知識がなくこれを機会に知りたい・学んでみたいと思い参加させていただきました。

プログラムに参加して感じたこと・学んだことは、1 つ目は「無知」が怖いということ、2 つ目は自分から進んで動くことの大切さです。私は今まで、被災したことがなく授業の中で習ったものしか防災グッズは知りませんでした。しかし、1 つの用途にしか使えないと思っていたものが多くのことで使えたりすることに驚き、これは知識がないと使うことができないなと思いました。そのことから「無知」が怖いということを学びました。

次に、自分から動く大切さです。本プログラムには、多くの先輩方が参加なさっていて任せっきりになってしまうことが多くありました。許可取りや三角巾の応急処置のことで本プログラムに参加している友人とともに考え行動することはありましたが、先輩方がしてくださっていたように、中心に立ち行動することはしていなかったのも、次にこのようなプログラムに参加することがあれば、しっかりと意見を話したりまとめたりできるように、周りを見て考え自分から進んで動いていきたいなと感じました。

反省点としては、上でもあげたように自分から進んで行動することが少なかったということと、今回企画したものに対する報連相が少なかったことです。企画されたことに対して、いつの間にこんなところまで進んでいたのだろう、と混乱したり、私がしていることがあまり知られていなかったりしたので、もっと細かく報告したり、相談したりを心がけようと思いました。

本プログラムに参加させていただいて、新しく知ったことや深められた知識がありました。とても良い経験になったと感じています。今回、学び得た知識をもっと深めたり伝えたりすることができたらいいなと思っています。

大坂 日和

実践女子大学 2 年

私が本プログラムに参加したのは、大学の先生や友人に誘っていただいたのがきっかけでした。元々自分自身が東北出身であったり、福島に親族が住んでいたりとすることで、震災発生から復興していく被災地を、ほかの方々に比べて少し身近で観ていました。震災発生直後の備えが足りていなかったことによる不便さや辛さ、遠くに住んでいるが故に、苦しい思いをしている家族を助けることができないと辛そうにしている母の姿などは、今でも記憶に新しいです。それを見て、自分にできることは何なのだろうかと悩んでいたこともあり、率先して参加させていただきました。

本プログラムで学んだことは、子どもや防災のことをそこまで知らないという方々へ伝えることの大変さです。私たちのように、防災に関する知識を身に着けた方や実際に震災を体験した方は、身近に感じているからか少し難しい内容であってもすぐ理解していただくことができました。しかし、まだ生まれていなかったり生まれていても物心がつく前だったりする子どもや、外国人の方、大きな災害のあったところから離れた場所に住んでいらっしゃる方からすれば、なかなか想像しにくかったことや、自分たちの力量不足もあり、うまく伝えきれないことも多々ありました。そういったかたにどうわかりやすく伝えるのが、大きな課題かと思います。

気づいた点は、どこかで防災に関する知識を身に着け、備えを行っていたとしても量やバランスが間違っている方が多くいたという点です。私自身もそうであったため、体験談を踏まえて正しい量を伝えることができました。実際に帰ってから冊子を見て見直してみますとおっしゃっていた方もいらしたので、よかったなと思います。

個人的な反省点は、力量以上のことをしようとして、グループの皆さんに迷惑をかけてしまったことです。もちろん何か新しいことにチャレンジすることは大切ですが、自分の日程ややるべき内容、できること、人に頼ることなどをしっかり考えたうえで取り組むべきだったと反省しております。

本プログラムに参加させてくださった事務局の方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。何もかも素人で、たくさんご迷惑をおかけしてしまうことも多々ありますが、グループの皆さんはもちろん、事務局の方々の支えがあったからこそ達成できたと思います。自分の人生において大きな糧にできるよう、より一層努力したいと思います。本当にありがとうございました。

吉川 莉香

実践女子大学 人間社会学部 人間社会学科 3 年

本プログラムは、大学の授業内で配られたチラシを見て知りました。東日本大震災を経験した私たちにしかできない「防災文化を世界に発信する」というテーマにとても魅力を感じました。また、実際に被災者の方々と交流できることにも興味を持ち、参加を決めました。

実際に参加してみて学ぶことはたくさんありました。震災時の状況や震災後の現在も住居や家族のことで問題を抱えている人々が多くいることを痛感しました。被災者の方々との交流で様々なことを知り、現在の被災者の状況をもっと深く知りたい、これからの防災を真剣に考えていくべきだと感じました。韓国でのイベントでは、言葉が通じないため自分たちが伝えたいことをきちんと伝えられているのが、なかなか分かりませんでした。

しかし、アンケートで「勉強になった」などの感想があったため、伝えることができたと思います。韓国では地震が少ないため、防災について考えることがあまりないということが分かりました。東日本大震災を経験して、地震が起きてからでは遅いということ、だから防災が非常に重要であるということを知っている私たちが、韓国の方に防災の大切さを伝えることができたことを誇りに思います。

反省点としては、韓国でのイベントで韓国の方やボランティアスタッフの学生と、もっとコミュニケーションをとるべきだったという点です。言葉の壁がありなかなか難しい部分もありましたが、実際に韓国で、韓国の方と触れ合える機会であったため、スマホを使ってでもコミュニケーションをとればよかったと思いました。防災や地震に対する意識も勿論、韓国人の考え方や価値観などをもっと学べたのではないかと思います。

石井 理子

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 3 年

今回の日本防災文化発信プログラムを通して私自身の成長にもつながり、他社との交流を通してとても多くの学びがありました。

まず、分科会を通して震災や防災の知識を身に付けていくなかで実際には経験していない事を理解することは難しいことだと感じました。また、経験のない中で知識や訓練でどうしたら埋めていくことができるのか、日頃からこうなったらこうするということマニュアルのように徹底的に叩き込まないとパニック状態で何もできなかったりするものが率直に怖いと感じました。自分自身も含め自然災害の恐ろしさを一人でも多くの人に防災知識をもってもらうことがどれだけ重要かということがわかりました。分科会はあまり人が集まらずに個人作業が多くもっと情報共有ができればよかったのかなと思いました。私はボランティア活動の経験がなかったので、協力して一つのことを成し遂げるという経験はとても自分の為になったと思います。

私は韓国プログラムに参加し、日韓交流お祭りで私は防災グッズ作りを担当しました。防災グッズ作りはとても好評で年齢問わず、多くの方に参加していただけて、楽しみながら使える知識を身に付けていただくことができてとてもよかったと感じました。身に付けた知識を人に伝えていくことの難しさもわかりました。今回参加したのが日韓交流お祭りということもあり、もともと来場者の多くが日本に関心を持っている方だったので私が想像していたより震災のことを知っている方が多くいることに驚きました。実際に経験していないとまだなんとなく他人事のように感じていて危機感のようなものがないので知識を持ち帰って事前に備えるというところまで実際に行動してくれている人はどれくらいいるのだろうかというところが気になりました。地震があったということだけでなく防災の知識や訓練をすることで一人でも多くの命が救えるような活動になればとても日本の防災文化は価値のあるものだと思えて感じました。日本でも地震後に生まれた子供たちには昔話のように感じてしまうというのを知り、伝えていくということが難しいと感じました。

私たちのような経験した世代が今後も日本だけにとどまらず世界にも広げていくことができれば大きな価値になると感じました。

大島 千春

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 3 年

私は、ゼミの先生である高木先生や李さんを通してこのプログラムを知りまだプログラムに1度も参加したことなかったことと、自身の興味のある韓国での実施であったため、より学ぶことができるのではないかと考え、今回このプログラムに参加した。分科会では、年齢性別も違う初めての方々とプログラムを実施することとなり、初めての経験であり、あまり自分から発言をするタイプではない私は緊張と不安があった。実際、夏休みでもなかなか休みが合わなかったりして集まらなかったりしたため、全体での話し合いなどは少なくグループ同士で理解してそれを代表者同士が伝え合うという感じであった。初めは、このような感じで大丈夫なのかと思っていたが、今後社会に出た時にも皆が集まらなくてもプロジェクトを進めなければいけないことがあると考えたら、このように進めそれぞれ理解をすることも必要なだと学んだ。プログラム当日は、COEX のイベント会場が大きいことは理解していたが会場に着くとそれをより感じたくさんの企業のブースがあり、圧倒されてしまっていた。しかし、イベントが開催されるとたくさんの方が会場に来ていて、私たちのブースにも多くの方が足を運んでくれ、持って行ったパンフレットはすべてなくなってしまった。自身が担当していた防災グッズのコーナーでは、現地のボランティアの学生と協力をして作り方を教えたりグッズの意味を教えたりし、小さい子などはスリッパを履いて歩いたりして「これはすごい。」などと言って喜んで持って帰ってくれた子もいてとても嬉しかった。1つ残念だった点は、ポスターを作って展示していたのだが、会場の配置の関係でイベントに参加した人が見やすいところに貼れなかったため、説明をしたりしてもらえなかったことが残念である。

このプログラムに参加したことで、自身の知らない中の韓国を知ることができたり、防災文化は日本がもっと発信するべき文化の1つでありとても重要であることが学べ、この経験を今後の自身の人生に活かしていきたいと思う。

小尾 加奈子

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 3 年

この度わたしは、日本防災世界発信プログラムに途中参加させていただきました。大学のゼミで海外の学生に日本の防災文化を伝える取り組みを通して、震災における問題や防災の在り方は、国際的に考えるべき課題となっていることを理解し、災害や防災について強い関心を持ったことがきっかけです。

このプログラムを通して学んだことを 2 つあげさせていただきます。

1 つ目はいかににより大きくの人を集客していくためには「積極的な行動」と「イベント内容の魅力」が鍵になっているということです。今回は主に子どもの集客率が高くなりましたが、お菓子やマジックを用いて積極的にアプローチしたことが結果に繋がったと思います。クッキーの販売については、魅力のあるマーケティングを考えることが重要であると感じました。

2 つ目は、私たちの力だけでなく、多くの方々の支えがあったからこそこのプログラムであったということです。それぞれが外国語の翻訳、当日のスタッフ集めなど、周囲に働きかけ、たくさんの方々が協力してくださいました。最後にテント撤去を手伝ってくれた方々や足を運んでくださったお客さん、皆さんの協力あってこそこのプログラムでした。

反省点としては、外国人へのアプローチが弱かったということがあげられます。今回のプログラムは、“外国人に防災について知ってもらう”という目標を掲げて取り組んできました。しかし、実際のイベントでは通行する外国人をブースに上手く呼び込むことができず、苦戦しました。チラシや掲示物を二か国語表記にしましたが、それに加えて、外国人が立ち止まってくれるようなフレーズを考えるというような準備をするべきであったと感じました。

また防災知識をより深める必要があるということもあげられます。私たちは今回、防災に関する知識を広める活動に取り組んできましたが、正しい知識を伝えるためには私たち自身が多くの正しい知識を身に着けていることが大前提としてあります。防災についてより学ぶ必要があると思いました。

2018 年の今年の漢字は「災」でした。わたしも同様、本プログラムを通じて防災知識の不足を痛感し、防災のあり方について考えさせられ、わたしにとっても「災」が深く関係した 1 年でした。

災難が一転して幸福の種に転じるという意味の「災い転じて福となす」ということわざがあります。このことわざのように、新しい年号を迎える 2019 年は、「災い転じて福となす」年になることを願います。また本プログラムの趣旨である、日本人だけでなく、国内外の方に防災を発信することで、災いが起きる前に防災をしっかりとし、誰もが安心して幸せな生活を送れるよう、これからも発信し続けていきたいと思います。

濱田 菜央

実践女子大学 人間社会学部 現代社会学科 4 年

プログラムに参加したきっかけは、ヘインさんからの誘いと、日本に住んでいる中で避けては通れない災害、その中でも特に地震に興味があったからでした。東日本大震災を経験したのは、中学生の時で、今でも鮮明に覚えています。しかし、今でも避難者がいるということは、このプログラムの最初の説明会で聞くまでは、知りませんでした。

実際に被災者の方々とボランティア活動を通し、最初に接した時は、何ら普通の人たちと変わらないと思いました。しかし、接していくうちに、避難の時の様子、東京で知り合いも少ない中、どう過ごしたらいいかわからない、介護が必要で頼れる人がいない等々の悩みを聞きました。その中で、特にお子さんがいる家庭だと、お子さんはすでに、東京での生活に慣れている。帰りたくても、子供たちにとっては、生まれた故郷がなくなっている状況だということに気づきました。戻ることが正しいことだとも、残ることが正しいものだとも、言えない、そういう葛藤を抱えていました。私は、心の支援が必要だと強く感じました。

実際に聞いた避難の体験談や、たくさんの人に興味を持ってもらえるようプログラムとして活動できたのは、大変良かったと思います。しかし、今回の目的であった、外国人に伝えるというところは、うまくいきませんでした。外国人の被災者の方にもお話を聞く必要があると思います。

そして、それを行うことで、今後、外国人も多く住む、関東エリアでの地震が起きた時、被害を最小限に抑えることができるのではないかと考えます。

栗田 茉那

大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 3 年

プログラムに参加したきっかけ

私の実家がある静岡県は、私が小さい頃から東海地震がいつ来てもおかしくないと言われ続けてきました。その為、幼稚園の頃から防災訓練を何回も行ってきました。今回はそんな私の身近にある地震や防災に関するプログラムということで、ぜひ参加したいと思いました。また、今までは与えられたことだけをやっていましたが、これを機会に自分から一歩踏み出して何かに挑戦したいと考えました。

学んだこと

学んだことは 2 つあります。1 つ目は、まず自国の防災文化を世界に発信するという機会に参加したことがなかった為、最初は右も左もわからない状態でしたが、ボランティア活動の回数が増えていくことで、故郷は異なっても参加者同士で楽しそうにお話をされている姿、「ありがとう」と言って笑顔で帰って行かれる姿を見られるのがとても嬉しく、いつしか私の中でボランティア活動が楽しみに変化していました。このような活動から人との出会いがいかに大切かを改めて学びました。

韓国での活動では、なかなか言葉が伝わらないという言語の壁があったにも関わらず、ブースを訪れた方が防災に関して楽しそうに学んでいる姿を見ることができ、大変有意義な時間でした。また、地震による自然災害や防災は、日本だけの問題ではなく、今や全世界と一緒に考えるべき重要な問題の 1 つであり、私達が学んだことを今後も幅広い世代に伝えていくことが重要であると感じました。まだ自国の文化で知らないことがあると考えられる為、自国の文化を周りに伝えていくには、まず私達が自国の文化についてより積極的に知るべきであると考えます。さらに、私達がボランティアで行ったような被災者の方から体験談を直接聞くことで、防災をより身近なものと考えられるのではないかと思います。他国の方に自国のことを伝える難しさを実感し、日頃から地震に備えておくことはどれだけ大切かを学びました。

2 つ目は、普段大学では、考えや行動範囲が似ている人と一緒にいる時間が多いですが、このように多種多様な人が集まって 1 つのことをこなすことに難しさを感じました。思った以上に発信しなければ伝わらないこと、先を見て考え行動することの大切さを学びました。来年社会人を控えるこの時期に、本プログラムへ参加し、以上のことを学べたことはとても良い機会となりました。

反省点

私の中でこのプログラムを通しての一番の反省点は、韓国で掲示したポスターです。せっかく時間をかけて、デザインにまでこだわり作ったポスターを一度も説明せずに終わってしまい、見てくれた方がいるかわからないことが挙げられます。原因としては、私達の声掛けが足りなかった可能性があると考えられます。もっと積極的にポスターにも目を向かせる必要があったのではないかと感じました。

ボランティア活動では、参加者の方にどんなことを話したらいいのか分からず自分からあまり積極的にコミュニケーションが取れなかったことが反省点です。

「成果発表会」参加者アンケート集計結果

2018/12/15（土）参加者17名うち回答者数15名

Q 1 本プログラムは有意義でしたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
有意義	15 名	100.0 %
どちらとも言えない	0 名	0.0 %
不満足	0 名	0.0 %
合計	15 名	100.0 %

n = 15 名（単一回答）

その理由

- 防災への意識を高められ、また防災文化の発信をすることができたから。プログラム参加の人たちと計画し、実際に計画を実行、団結して活動することの大切さを学べたから。
- 皆に出会えたから。
- 今までのない経験をすることができたから。
- 防災を広めることは無論、自分も防災についての知識を身に付け、再確認できた。
- 半年かけてチームで協力し、プログラムを終えることができ、自分自身の成長にもつながった。
- 普段では経験できない事を多くやらせてもらえた。
- 自分たちで企画を考える段階から始めることで、いろいろな知識を身に付けたり、入念な準備が必要だと身を持って学ぶことができました。
- 避難者の方に当時のことや現在のお話などが聞けて、私自身も元気や勇気をもらいました。
- 発表で活動をまとめる所までできたので良かった。しかし、もっとみんなで集まって話せたら知識も深まるし、企画もつめられたと思う。
- 知らなかったことを知ることができたり、自分の知っていることを相手に伝えたりすることができた。
- 個人的にも団体に所属する力も成長できた。
- 自分の知らない韓国の人たちの考えを知ることができたから。

Q 2 本プログラムを通じて「防災意識の啓発」に役に立ちましたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
役立つ	15 名	100.0 %
どちらとも言えない	0 名	0.0 %
役立たない	0 名	0.0 %
合計	15 名	100.0 %

n = 15 名（単一回答）

その理由

- ブースを訪れてくれた方が少ないながらも、感心を持って下さる方が多く、そのような方にはしっかり防災についての知識を身に付けて頂いたと思うから。
- 案外と「知らなかった」という声が多くみられたから。

- ▶ 防災についての理解が深まったから
- ▶ 様々な年代の方々に自分たちなりに工夫して伝えられた。さらに、クイズなどを通して「初めて知った！」と言ってくれた方もいて活動したがいがあった。
- ▶ 私たち日本人にとっても、海外の人にとっても非常に重要であるということを発信できた。
- ▶ まだ知らなかった地震に対する知識を得ることができた。
- ▶ イベントへの参加を通して、少しでも多くの人に防災について知ってもらうことができたと思います。
- ▶ 知らないことを沢山知れた。
- ▶ 自分が得た知識を友人や家族に沢山伝えることができた。
- ▶ 防災文化は日本の魅力の一部だと思う。
- ▶ 防災について見つめ直すことができた。
- ▶ 防災を文化と捉えて世界に発信していることは、なかなかない試みのため。
- ▶ 今までよりも防災について深く考え直す、見つめ直す良い機会でした。

Q 3 プログラム参加前と後で「ボランティア」に関する意識は変わりましたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
変わった	12名	80.0%
変わらない	3名	20.0%
合計	15名	100.0%

n = 15名 (単一回答)

具体的に

- ▶ 利己的のみでやっている訳ではなく、本当に役立っていると思う。
- ▶ ボランティアにも様々なものがある。自分の成長につながる。
- ▶ ボランティアは、周りに「手を差し出す」という与える側ではない。むしろ、ボランティアを通して周りから沢山のものを与えてもらえる。周りがあるからこそ活動ができているのだと、強く感じた。
- ▶ ただの善意で行うのではなく、自分で考え、行動し、学ぶことにつながられた。
- ▶ 変わらず一人ひとりが責任を持って参加しなければいけないと感じた。
- ▶ ボランティアという言葉だけだと、少し大変そうに感じていましたが、実際に参加してみて、楽しいものだと思えました。
- ▶ ここまで近い距離で参加者の方と関われるとは思っていませんでしたが、色々な方とコミュニケーションができて、楽しい時間でした。
- ▶ ただ与えられたことをやるのではなく、率先して何をすべきか、自分がやりたいことは何か、判断できるようにすべきだという、考えがうまれた。
- ▶ 自分にできることをする、したいという意識が生まれた。
- ▶ かつてボランティアに参加したことがあったのだが、人の話を聞いて考えることも、ボランティアにつながると気が付いた。

Q 4 また「日本防災文化 世界発信 プログラム」に参加又は周りに紹介したいと思いますか？

項 目	回 答 者 数	割 合
参加（紹介）したい	11名	73.3%
検討中	4名	26.7%
参加（紹介）したくない	0名	0.0%
合計	15名	100.0%

n = 15名 (単一回答)

その理由

- ▶ もっと防災について知識を深め、自分や家族、周りの人たちの身を守れるようになりたいと思うから。プログラムに参加しないと出会えない方々に会うことができるから。
- ▶ ボランティアとしてだけではなく、他のことも役立つから。
- ▶ 自分にも新たな知識を身に付けることができ、事前に計画する大切さを学び、それを実行に移す難しさをみんなで乗り越えられたから。
- ▶ 防災について考えることができ、とても勉強になると考えた。
- ▶ やりがいがあったし、次に活かせる事を学んだため、もう一度チャレンジしたい。
- ▶ 長期間に渡って一つことに取り組み、いい経験ができたと感じるため。
- ▶ 様々な方と交流できるし、自分自身も防災ついて改めて考え直す良い機会になったからです。
- ▶ 海外に文化を広めるのは、良い学びだと思うので。
- ▶ 自分の将来やりことに直結していて、かつ、震災や防災のことを今度はもっとたくさんの日本人、外国人に伝えたいと思った。
- ▶ 他にはないプログラムのため参加の意義があったと思ったため。
- ▶ 就活が始まるため。(※「検討中」と回答した理由)

Q 5 本日のプログラムは役に立ちましたか？

対人基礎力	項 目	すごく成長した	成長した	変わらない
	異なる意見を受け入れる多様性の受容(コミュニケーション力)	4名	11名	0名
	チームへの貢献(サポート力)	9名	5名	1名
	他者の力を引き出す(リーダーシップ力)	4名	8名	3名

問題発見力	項 目	すごく成長した	成長した	変わらない
	情報収集力	4名	10名	1名
	課題発見力	9名	5名	1名
	原因分析力	5名	10名	0名

実践力	項 目	すごく成長した	成長した	変わらない
	計画立案力(目標設定・リスク検討等)	3名	10名	2名
	判断力・対応力	7名	8名	0名
	検証・改善能力	6名	8名	1名

n = 15名 (単一回答)

Q 6 今回の「日本防災文化 世界発信 プログラム 2018」に対してご感想や、今後に望むことがあればご記入ください。

はじめは、全く知らない人がいて、歳もバラバラの環境で、自分が何をすればいいのか、分からず緊張していましたが、分科会を

＞重ねていく中で、自分で案を出したり、それが実行される楽しさ、嬉しさを感じました。より防災について知識を増やしたい、我が家でも防災の支度をしたいと思います。

＞継続してほしいと思います。また、このプログラムに対して本気が見るために、面接を挟んでもいいのではと思います。

最初に想像していた以上に忙しいボランティアで、今までやったことのないポスター作りであったり、大変なことは多かった。

＞しかし、被災者の方々との交流や防災についての勉強、韓国の交流イベントなど、今までしたことのない経験を行うことができた。自分にとって、とても勉強になったし、成長できたと思う。

世界発信というプログラムでしたが、大変自分のためになりました。防災の知識や計画・実行の大切さは無論、このプログラム

＞に参加していなかったら気づけなかったことが沢山学べました。次回もやるとしたら、もっと世界発信ということに力を入れて、日本の防災文化を広めていきたいです。

＞防災について考える、またそれを発信するといった貴重な経験をさせて頂き、自分自身の成長に大きくつなげることができました。これからも、災い転じて福と為すような活動をしていければと思います。

＞次に活かせる自分自身の改善点も見つける事ができたので、来年もこのプログラムに参加したいと思いました。有意義な時間でした。

＞事務局の方々にもサポートをして頂くことで、 イベント等の企画が成功できたと感じています。自分自身にとっても、積極性の重要性を改めて認識できて、とても良い機会になりました。ありがとうございました。

本当に素晴らしいプログラムに参加させて頂きました。様々な年代や他国の方と交流し、コミュニケーションがとれて、自分自身も

＞成長できる良い機会でした。また、防災について詳しく知って学ぶことができ、自分の防災に対する考え方を見つめ直す良い機会でした。

＞第一回の分科会で、全ての分科会のスケジュールを決められれば良いと思います。また、リーダーなどの役割分担をしっかり決めるようにしたいです。

普段生活している中ではなかなか体験できないことを、本プログラムで経験できました。様々なイベントの準備をする中で、自分が貢献できたところもありましたが、スキル不足や判断力不足などが起因してうまくできなかったところもありました。

＞今回できなかったところを次回できるように、今回できたところはもっと良くできるように、率先して頑張りたいです。自分が将来やりたいことを考えていた中、このような素敵なプログラムに参加させていただき、ありがとうございました。やりたいことが定まったような気がします。

＞自分の役割を明確にして率先して取り組めた。何が必要なのか以前より進んで考えられるようになったと思う。日本の良さをさらに発信していける機会があれば良いなと感じた。

このように他の大学の方と新しいものを作り上げていくものが初めてだったので、自分の新たな面を知ることができました。

＞また防災というものと向き合い、考えたことで知らなかった情報をたくさん得ることができました。まだまだ多くの学びを得ることができ、大変有意義な経験でした。ありがとうございました。

＞初めは、韓国のとても大きな場所での発表で緊張や心配もありましたが、みんなで力を合わせこのプログラムを終えることができたのでよかったです。このプログラムを実施してくださった多くの方に感謝いたします。

10 添付資料

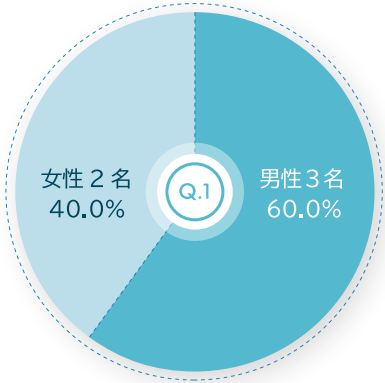
「新宿防災フェスタ2018」参加者アンケート (外国人)集計結果

2018/9/2(日) 回答者数5名

Q 1 性別

項 目	回 答 者 数	割 合
男性	3名	60.0%
女性	2名	40.0%
合計	5名	100.0%

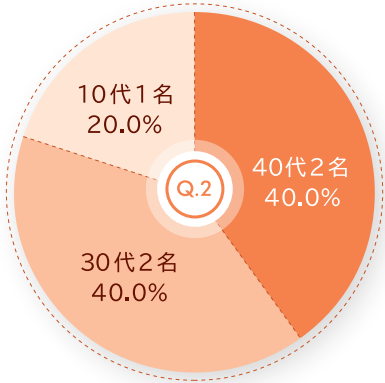
n = 5名(単一回答)



Q 2 年齢

項 目	回 答 者 数	割 合
40代	2名	40.0%
30代	2名	40.0%
10代	1名	20.0%
合計	5名	100.0%

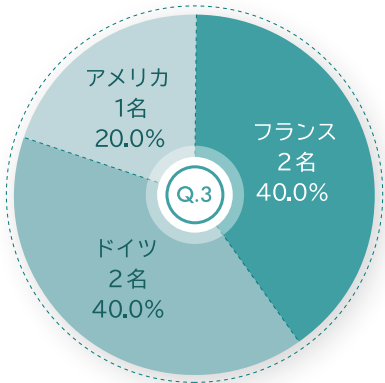
n = 5名(単一回答)



Q 3 出身国

項 目	回 答 者 数	割 合
アメリカ	1名	20.0%
フランス	2名	40.0%
ドイツ	2名	40.0%
合計	5名	100.0%

n = 5名(単一回答)

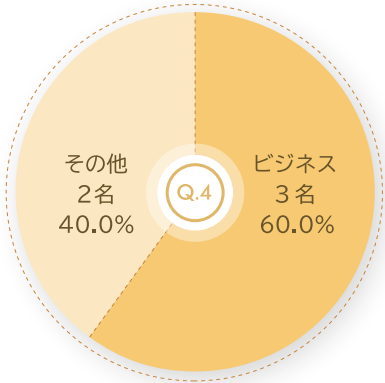


Q 4 来日目的

項 目	回 答 者 数	割 合
ビジネス	3名	60.0%
その他	2名	40.0%
合計	5名	100.0%

※その他：日本に住んでいる

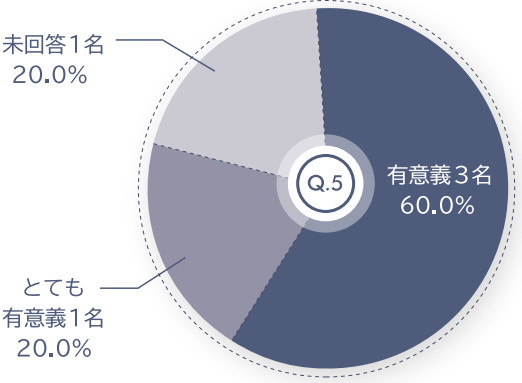
n = 5名(単一回答)



Q5 本日のプログラムは役に立ちましたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
とても有意義	1名	20.0%
有意義	3名	60.0%
未回答	1名	20.0%
合計	5名	100.0%

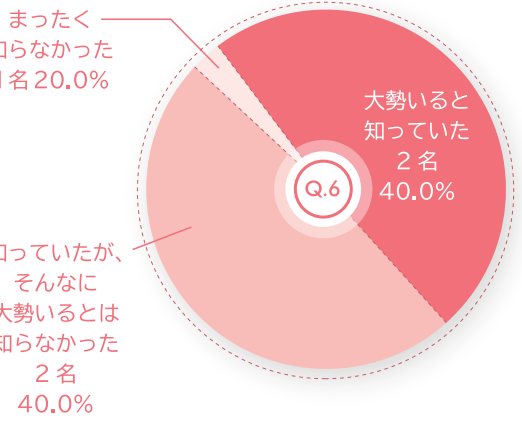
n = 5名(単一回答)



Q6 東日本大震災から7年経ちましたが、今でも避難生活を送る方が大勢(関東地方で約2万2千人)いることをご存知でしたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
大勢いると知っていた	2名	40.0%
知っていたが、そんなに大勢いるとは知らなかった	2名	40.0%
まったく知らなかった	1名	20.0%
合計	5名	100.0%

n = 5名(単一回答)



Q 7 展示や冊子をご覧になって、防災について意識の変化や感じたことはありますか？(複数回答可)

項 目	回 答 者 数	回 答 者 数 に 占 め る 割 合	
日頃、災害に備えておこうと思いながらも、できなかったため、これを機に改めて備えをしておこうと思った	3名	60.0%	60.0%
家族で避難場所などを話し合おうと思った	1名	20.0%	20.0%
日頃の地域のコミュニケーションが大切だと思った	1名	20.0%	20.0%

n = 5名(複数回答あり)

Q8 次は、日本の標識(ピクトグラム)です。分かりづらいものはありますか？
また、改善してほしい点などありますか？



記 述

＞ 特にありません。

＞ 問題はありません。

※今回、回答者5名がこれらの標識について問題ないと示した。しかしながら、5名という少人数の回答である為、今後、より多くのヒアリング調査が必要であると考えられる。

Q9 ご感想やメッセージがございましたら、ご自由にお書きください。

I've leaned a lot og things to know when there is an earthquake.
(災害が起きた時の対応について学びました。)

I think it very important to have events like this.
(このようなイベントはとても大切であると感じました。)

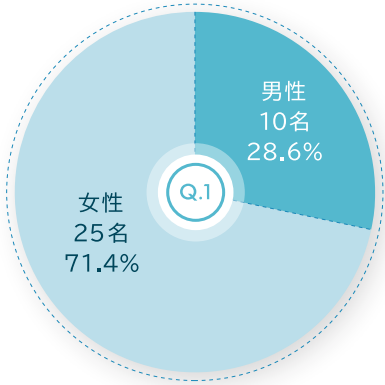
Thank you for the kind assistance and explanation. I will buy the triangle band in case someone
> needs to be taken care of.
(親切に説明してくださりありがとうございます。私も災害時に備えて三角巾を買いたいです。)

「新宿防災フェスタ2018」参加者アンケート
(日本人) 集計結果 2018/9/2(日) 回答者数35名

Q 1 性別

項 目	回答者数	割 合
男性	10名	28.6%
女性	25名	71.4%
合計	35名	100.0%

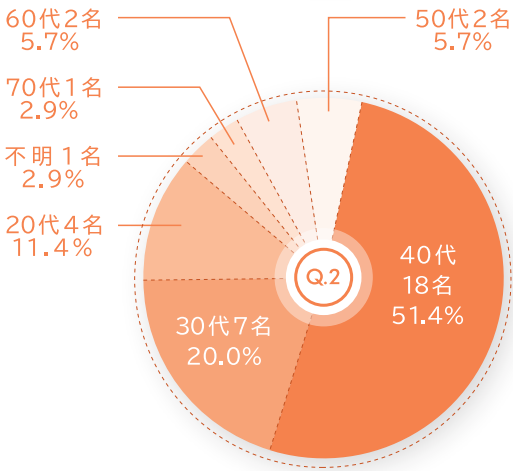
n = 35名(単一回答)



Q 2 年齢

項 目	回答者数	割 合
70代	1名	2.9%
60代	2名	5.7%
50代	2名	5.7%
40代	18名	51.4%
30代	7名	20.0%
20代	4名	11.4%
不明	1名	2.9%
合計	35名	100.0%

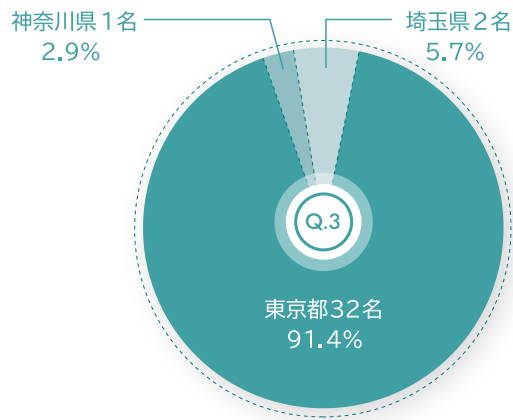
n = 35名(単一回答)



Q 3 現在の居住地

項 目	回答者数	割 合
東京都	32名	91.4%
神奈川県	1名	2.9%
埼玉県	2名	5.7%
合計	35名	100.0%

n = 35名(単一回答)



東京都 計32名

東京都新宿区	21名	34.4%	東京都足立区	1名	1.6%
東京都渋谷区	1名	1.6%	東京都文京区	1名	1.6%
東京都豊島区	1名	1.6%	東京都国立市	1名	1.6%
東京都中野区	2名	3.3%	東京都狛江市	1名	1.6%
東京都杉並区	1名	1.6%	東京都市区町村不明	2名	3.3%

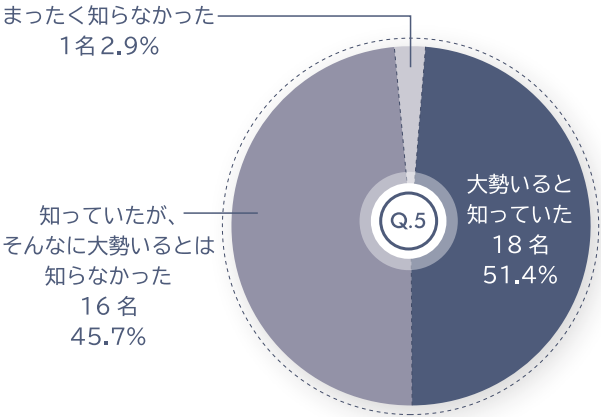
神奈川県 計1名 埼玉県 計2名

神奈川県川崎市	1名	1.6%	埼玉県さいたま市	1名	1.6%	埼玉県見沼市	1名	1.6%
---------	----	------	----------	----	------	--------	----	------

Q4 東日本大震災から7年が経ちましたが、今でも避難生活を送る方が大勢（関東地方で約2万2千人）いることをご存知でしたか？

項 目	回 答 者 数	割 合
大勢いると知っていた	18 名	51.4 %
知っていたが、そんなに大勢いるとは知らなかった	16 名	45.7 %
まったく知らなかった	1 名	2.9 %
合 計	35 名	100.0 %

n = 35 名 (単一回答)



Q5 展示や冊子をご覧になって、防災について意識の変化や感じたことはありますか？(複数回答可)

項 目	回 答 者 数	回 答 者 数 に 占 め る 割 合	
日頃、災害に備えておこうと思いながらも、できなかったもので、これを機に改めて備えをしておこうと思った	27 名	77.1 %	77.1%
家族で避難場所などを話し合おうと思った	16 名	45.7 %	45.7%
日頃の地域のコミュニケーションが大切だと思った	11 名	31.4 %	31.4%
非常用の持ち出し袋や食糧などを用意しておこうと思った	17 名	48.6 %	48.6%
今後、災害に遭った方には思いやりをもって接したいと思った	11 名	31.4 %	31.4%
すでに防災対策はできている (ということを確認できた)	0 名	0.0 %	0.0%
その他	2 名	5.7 %	5.7%

※その他：持ち出し袋の中身が不十分と感じた

n = 35 名 (複数回答あり)

Q6 感想やメッセージがございましたら、ご自由にお書きください。

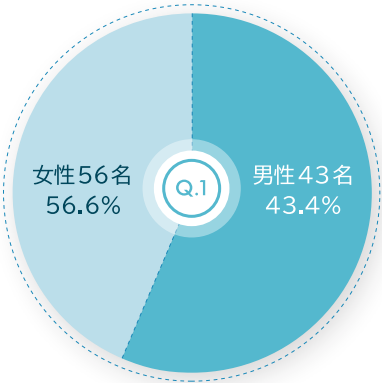
- 子供にも分かりやすくて良かったです。
- お菓子が貰えて、子供が喜びました。ありがとうございました。
- 実際に怪我をした時の練習ができて良かったです。
- 勉強になりました。ありがとうございます。
- 三角巾の結び方の経験が出来て良かった。
- すぐくためになりました。実践することが大事だと感じました。
- 災害に備えようとおもいました。
- 日頃、災害のことを考えないのできっかけとなりました。

「日韓交流おまつり 2018 in Seoul」参加者アンケート集計結果 2018/9/9 (日) 回答者数99名

Q1 性別

項 目	回 答 者 数	割 合
男性	43 名	43.4 %
女性	56 名	56.6 %
合 計	99 名	100.0 %

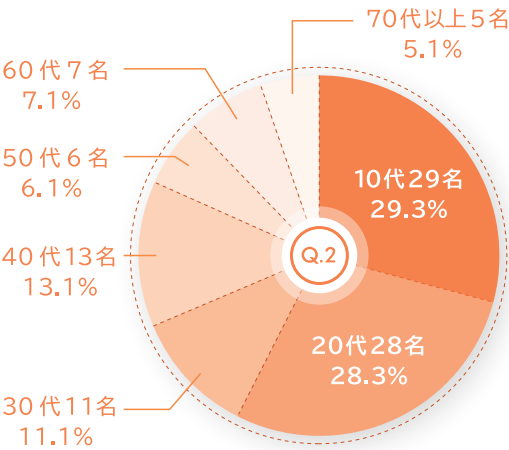
n = 99 名 (単一回答)



Q2 年齢

項 目	回 答 者 数	割 合
10代	29 名	29.3 %
20代	28 名	28.3 %
30代	11 名	11.1 %
40代	13 名	13.1 %
50代	6 名	6.1 %
60代	7 名	7.1 %
70代以上	5 名	5.1 %
合 計	99 名	100.0 %

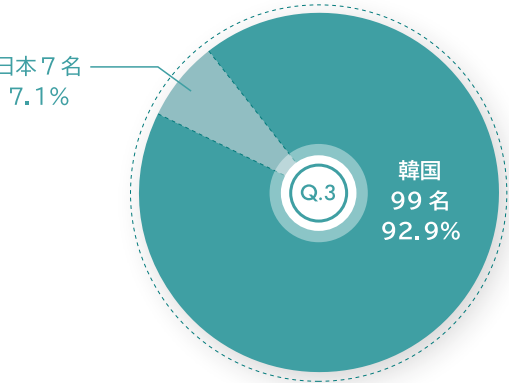
n = 99 名 (単一回答)



Q3 出身国

項 目	回 答 者 数	割 合
韓国	92 名	92.9 %
日本	7 名	7.1 %
合 計	99 名	100.0 %

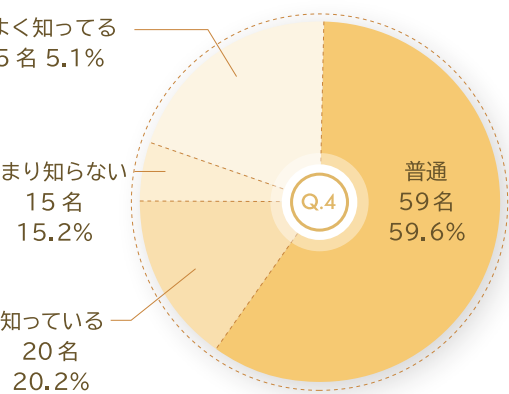
n = 99 名 (単一回答)



Q4 あなたは防災についてどのくらい知っていますか？

項 目	回 答 者 数	割 合
よく知っている	5 名	5.1 %
知っている	20 名	20.2 %
普通	59 名	59.6 %
あまり知らない	15 名	15.2 %
合計	99 名	100.0 %

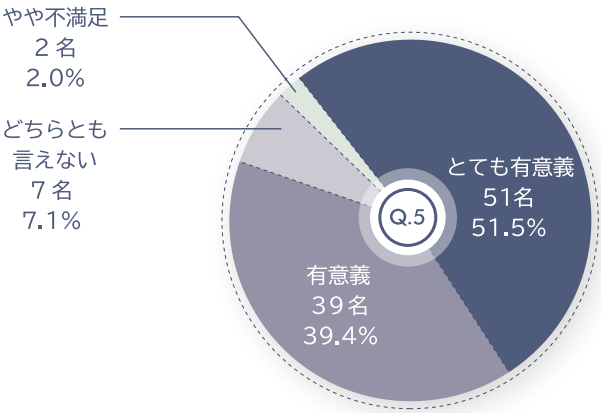
n = 99 名 (単一回答)



Q5 本日のプログラムは役に立ちましたか？

項 目	回答者数	割 合
とても有意義	51名	51.5%
有意義	39名	39.4%
どちらとも言えない	7名	7.1%
やや不満足	2名	2.0%
合計	99名	100.0%

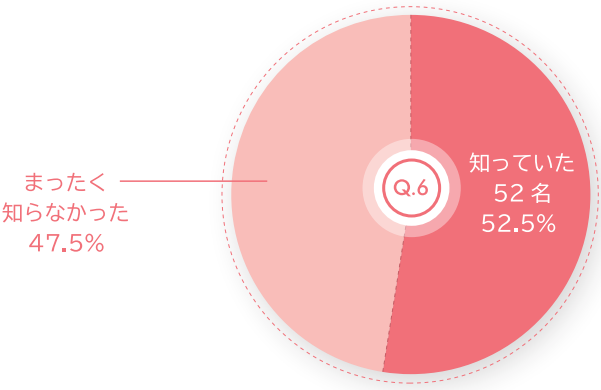
n=99名(単一回答)



Q6 東日本大震災から7年が経ちましたが、今でも避難生活を送る方が大勢(関東地方で約2万2千人)いることをご存知でしたか？

項 目	回答者数	割 合
知っていた	52名	52.5%
まったく知らなかった	47名	47.5%
合計	99名	100.0%

n=99名(単一回答)



Q7 展示や冊子をご覧になって、防災について意識の変化や感じたことはありますか？(複数回答)

項 目	回答者数	回答者数に占める割合	
日頃、災害に備えておこうと思いながらも、できなかったなので、これを機に改めて備えをしておこうと思った	82名	82.8%	82.8%
家族で避難場所などを話し合おうと思った	22名	22.2%	22.2%
日頃の地域のコミュニケーションが大切だと思った	16名	16.2%	16.2%
すでに防災対策はできている(ということを確認できた)	3名	3.0%	3.0%
その他	3名	3.0%	3.0%

M=99名(複数回答)

※その他

- 딱히 없는 것 같다.
(特に無し。)
- 상식들을 알았다.
(防災に関する知識が分かった。)
- 생각해보지 못한 슬리퍼 만들기, 라는 방법이 유용할 것 같아요.
(スリッパ作り、とても有効です。)

Q8 次は、日本の標識(ピクトグラム)です。分かりづらいものはありますか？また、改善してほしい点などありますか？

1. 広域避難場所

回答者：25名
割合：25.3%

2. 津波避難場所

回答者：5名
割合：5.1%

3. 避難場所

回答者：6名
割合：6.1%

4. 津波避難ビル

回答者：11名
割合：11.1%

改善してほしい点(1.の改善が必要と回答した方)

- 안전표시가 필요할 것 같습니다.
> (安全表示などが必要だと思います。)
- 광역의 의미가 사람마다 다르게 전달될 수도 있고, 범위도 사람마다 달라서 정확한 범위를 지정해주면편할지도.
> (人によって広域の意味やその範囲が異なるので、明確に指定したほうが良いと思う。)
- 광역이라는 것을 표현하기 어렵다는 점. 한눈에 봐서 알 수 없다.
> (広域の表現が難しい。一目で見ただけでは理解できない。)
- 광역 대피장소가 알아보기 조금 힘든 것 같습니다. 대피 장소라는 건 알겠지만, 그곳이 '광역'인지 잘 모르겠습니다. 원이 조금 더 커지거나 위에 광역이라는 표시를 해두면 어떨까 싶어요.
> (広域避難場所が多少分かりにくいです。避難場所であることは分かるけど、その場所が、広域であるかどうか、よく分かりません。)
- 그냥 땅 밟는 기분이라서 원을 더 크게 그려주시면 좋겠습니다.
> (ただ地面の上を踏んでいるように見えるので、丸をより大きく描いてほしいです。)
- 광역이라는 느낌이 잘 전달되지 않음.
> (広域であることが上手く伝わっていないと感じる。)
- 약간 알아보기 어려움.애매하다.
> (多少わかりづらい。表示が曖昧である。)
- 이해하기 어렵다.
> (広域避難場所と理解しにくい。)
- 맨홀 갈아서 구덩이를 조심해야 하는 느낌이다.
> (マンホールのように見えて、マンホールの穴に対する注意表示みたい。)

- 대피장소라고 이해 어려움.
> (避難場所であることが分かりづらい。)

改善してほしい点（3.の改善が必要と回答した方）

- >

出口にも見える。
- >

避難場所に見えない、ビルに見える。

改善してほしい点（4.の改善が必要と回答した方）

- >

ビル 의미가曖昧。
（ビルの意味が曖昧である。）
- >

海일 대피 빌딩은 처음 보면 생소할 수도 있을 것 같다.
（津波避難ビルは見慣れていないので分かりにくいと思った。）

その他の意見

- >

광역 대피장소 및 해일 시에 대피하는 장소라는 걸 사전에 배워야 알 수 있을 것 같다.
（広域避難場所および津波発生時に避難する場所であることを、事前に勉強すれば分かると思う。）
- >

이해가 잘 된다.
（全て理解できる。）
- >

광역 대피장소와 지정 대피소는 알기 어려운 것 같으나 꾸준한 교육을 하면 괜찮을 것 같다.
（広域避難場所と指定の避難場所が分かりづらいが、継続的に教育すれば、理解できると思う。）
- >

광역과 지정대피소 표지판이 조금 어렵다.
（広域避難場所と指定の避難場所の標識が難しい。）
- >

평소 접하지 못하는 표지판들이라 대체적으로 생소하네요. 한국에도 이런 교육이 자주 이뤄졌으면 좋겠습니다.
（普段、あまり見ない標識なのでほとんどが見慣れていません。韓国でも、このような教育が行われてほしいと思います。）
- >

처음 본다.
（これらの標識を初めて見ました。）

Q 9 ご感想やメッセージがございましたら、ご自由にお書きください。

- >

身近なもので防災グッズを作れるのは、すごくいいことだと思いました。新聞紙でスリッパが作れることに驚きました。家でもう一つ作ってみます。いい勉強になりました。
- >

ありがとうございます。
- >

한국보다는 일본의 재해 교육이나 방침, 대책이 훨씬 잘 되어 있다고 생각해왔는데실제로도 그렇다는 것을 느꼈다.
（今回のプログラムに参加して、日本の防災教育の方針や対策等が韓国より発展していることを実感できました。）

- >

일본은 한국보다 지진이나 해일에 관한 예방 대책이 더 많이 알려지고 있다는 것은 알고 있었으나신문지로 슬리퍼 만드는 법은 처음 알았다. 굉장히 신기했다.
（日本は、韓国より地震や津波に対する対策がより優れていることは知っていたが、新聞紙でスリッパを作ることができるのは初めて知った。すごく驚きました。）
- >

이러한 활동으로 지진 예방도 사소하지만 확실히 할 수 있어 좋았어요.
（このような活動を通じて、ほんの少しですが震災の備えができて良かったです。）
- >

좋은 프로그램입니다. 도움이 되었습니다.
（よいプログラムだと思います。役に立ちました。）
- >

이 프로그램으로 인해 도움이 많이 되었다.
（このプログラムに参加して、大変役に立ったことが沢山ありました。）
- >

지진에 대비한 이러한 활동을 더 많이 제공했으면 좋겠습니다.
（地震に備えて、このような活動をより多く提供してほしいです。）
- >

의외로 재난관련한 지식이 전무하다는 것을 느낌.
（自分自身、防災に関する知識が乏しいということに気づいた。）
- >

지진에 대해 새롭게 알게 되었습니다.
（地震について多くの知識を得ることができました。）
- >

간단하지만 혹시나 있을 수 있는 재난에 대해 조금은 준비를 할 수 있게 된 것 같아 든든해졌습니다.
（簡単ですが、万が一起きるかもしれない災害に対して少し備えることができてよかったです。）
- >

간단한 지진 대책 방법을 배울 수 있어서 좋았어요.
（簡単な地震対策の方法を学べて良かったです。）
- >

급할 때 사용할 수 있어서, 배워서 매우 유익했다!
（緊急時に対応すべきことを学べて大変有益でした。）
- >

지진 등 자연재해에 대한 대책! 대비책을 평상시에 잘 알아둬야겠다고 생각합니다.
（地震など、自然災害に関する対策！日頃から防災について勉強しなければならないと思いました。）
- >

지진 대비를 잘 해야겠다.
（地震に備えなければならないと思った。）
- >

자세한 대책을 생각해 놓아야겠다.
（防災についてもっと考えるべきである。）
- >

오랜만에 지진대피에 대해 다시 알게 돼서 좋았다.
（久しぶりに地震の避難について知れてよかった。）
- >

보람차고 잘못 알고 있는 것이 많았다는 것을 깨달았다.
（自分の防災知識が間違っていることに多く気づきました。とても有意義な時間でした。）
- >

（지진 발생 시）가스불을 바로 끄면 안 되는 것은 처음 알았다.
（（地震で揺れている時）ガスコンロの火をすぐに消してはいけないことを初めて知った。）

OX퀴즈로 지진대책에 대해 알 수 있어 좋은 기회였습니다.

（○×クイズで防災について知ることができ、よい機会でした。）

지진대피는 평소의 대피 연습이 중요하다.

（震災時の避難は、日頃の訓練が重要であると感じました。）

처음 알았습니다. 배워야 할 것 같습니다.

（防災について初めて知りました。今後、勉強しなければならないと思いました。）

지진 피해 대책에 대해 잘 알게 되었다.

（震災の対策について知ることができました。）

（신문지 실내화에 대해서）생각보다 착용감이 좋아서 맨발도 좋습니다.

（（新聞紙のスリッパについて）思ったより履き心地がよくて、裸足でも履ける。）

지진 대피 물건을 만들며 지진에 대해 한 번 더 생각할 수 있는 기회가 되어 좋았습니다.

（避難時のグッズを作ってみて、地震についてもう一度確認できる機会となり、よかったです。）

종이접기 재밌었어요.

（防災グッズ作りでの折り紙がとても面白かったです。）

실내화를 신문지로 만들 수 있다는 게 신기하고 이 방법은 잊으면 안 될 것 같습니다.

（新聞紙でスリッパを作っていました。この作り方は、忘れないようにします。）

고맙고 소중한 정보 감사합니다.

（大切な情報をありがとうございます。）

모두들 친절해서 좋았어요.

（スタッフの皆さんがとても親切でよかったです。）

짧은 시간이지만 재미있고 유익했습니다.

（短い時間でしたが、面白くて楽しい時間でした。）

도움이 많이 되었습니다.ありがとうございます。

（大変役立ちました。ありがとうございます。）

재미있었습니다.ありがとうございます。

（内容が面白かったです。ありがとうございます。）

좋아요.힘내세요.

（よかったです。お疲れ様でした。）

덕분에 재밌고 알찬 시간이 되었습니다.

（お陰様で、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。）

우리나라에는 지진이 안 나기를 ...

（韓国では地震が起こらないように…。）